

小学校における通知表等所見の現状 ～教師のキャリア形成として～

山崎 宣次^{*1}／森広 浩一郎^{*2}／掛川 淳一^{*3}／中間 玲子^{*4}／小川 修史^{*5}
加藤 直樹^{*6}／日比 光治^{*7}／興戸 律子^{*8}

＜概要＞小学校の校務の中で通知表の所見を書くことは教師にとって非常に負担となっている。そこで、通知表等の所見の書き方について教師にアンケートを行った。その結果、所見をどのように書いたら良いかは、教員養成としての大学教育では扱われていないばかりか、教育現場においても具体的な所見の書き方の指導はほとんど行われておらず、各自で学ぶことが多いという現状が分かった。教師として児童に適切な所見が書けるようになる教師のキャリア形成の視点で現状の問題点を指摘し、今後のあり方をさぐる。

＜キーワード＞校務の情報化、キャリア形成、教師教育、教員養成

1. はじめに

筆者は昨年度全国10小学校176名の小学校教職員を対象にどの校務に負担感を感じるかを調査した(山崎, 2013)。その結果、通知表の所見(以下所見とする)が最も負担感が大きいことが分かった。

所見の書き方に関する本はいわゆる文例集として数多く出版されているが、純粋に通知表を研究対象としている先行研究としては西森(2009)や細川(2008)らの研究などがある。しかし、これらの研究は通知表の観点別評価の観点項目についての研究で通知表の観点項目から学力観の変遷を研究したものであり、所見に関するものではない。

そこで、所見に関して教師は何を参考にし、どこに苦労しているかを具体的に調査した。

また、通知表を受け取る側の児童は所見についてどのように感じているかを大学生を対象に当時を思い出させて調査した。

本研究の目的は、これらのアンケート調査の結果から、小学校における所見の現状報告をすると共に、児童にとって効果的な所見を書けるようになるための教師のキャリア形成支援について検討することである。

2. 調査方法

(1) 所見を受け取る側(児童)と(2) 所見を書

く側(教師)の両面から下記のように質問紙によるアンケートを実施した。

(1) 所見を受け取る側

- ・実施時期 平成25年6月
- ・実施対象者 大学生 71名

(2) 所見を書く側

- ・実施時期 平成25年6～7月
- ・実施対象者
大阪府と岐阜県の5小学校教職員 59名

3. 調査結果

(1) 所見を受け取る側(大学生)

「あなたは小中学生の時、通知表のどこを一番見ていましたか。」という問いには図1のように所見を一番見ていたと回答していた学生は、

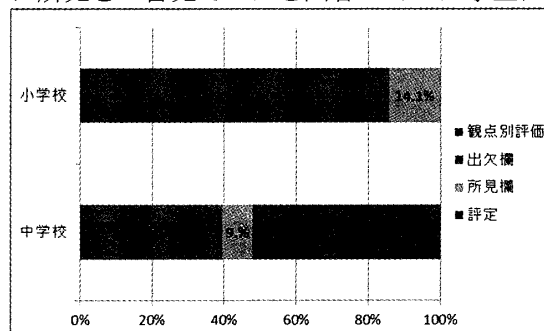


図1 通知表で一番見ていたところ n=71

- * 1 Yamazaki, Senji : 大阪成蹊短期大学 児童教育学科 e-mail=yamazaki-s@osaka-seikei.ac.jp
- * 2 Morihiro, Koichiro : 兵庫教育大学 大学院 学校教育研究科
- * 3 Kakegawa, Junichi : 兵庫教育大学 大学院 学校教育研究科
- * 4 Nakama, Reiko : 兵庫教育大学 大学院 学校教育研究科
- * 5 Ogawa, Hisashi : 兵庫教育大学 大学院 学校教育研究科
- * 6 Kato, Naoki : 岐阜大学 総合情報メディアセンター
- * 7 Hibi, Mitsuharu : 岐阜大学 大学院 教育学研究科 教職大学院
- * 8 Okido, Ritsuko : 岐阜大学 総合情報メディアセンター

小学生時で14.1%, 中学生時で9.0%と低く, 一番の関心は, 観点別評価や中学生時では評定といったいわゆる成績であった。

次に所見欄に書かれた担任教師の言葉についてどう思うかを多肢選択で聞いたのが図2である。

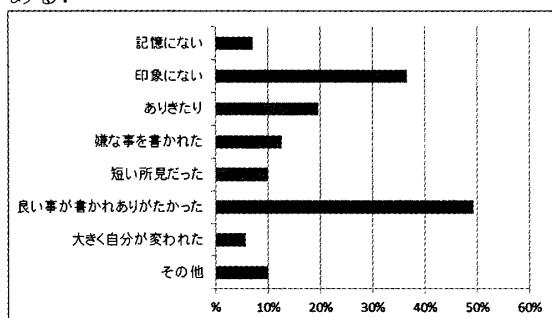


図2 所見の先生の言葉に対する思い n=71

所見の言葉で励まされ, 自分が大きく変わったといった学生は71人中4人しかいなかったが, そこまではなくても所見の言葉は自分の良いところを見つけてもらえ, ありがたかったと感じている学生はほぼ半数いた。

(3) 所見を書く側 (教師)

学生時代に直接教えてもらったことがある教師は図3のように59人中, 大学の授業では1人, 教育実習では3人しかいなかった。ほとんどは教師になってから学んでいる。

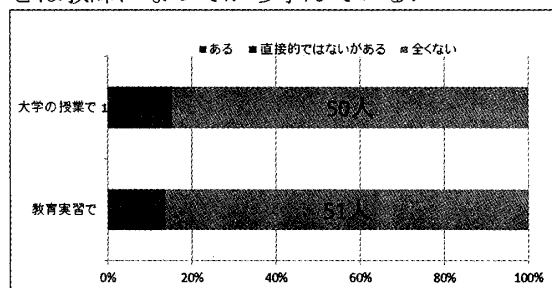


図3 所見の書き方を学生時代に教えてもらったか n=59

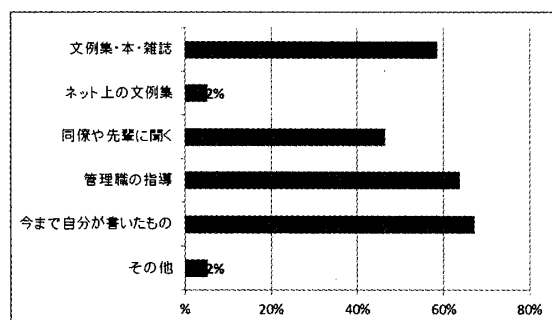


図4 何を参考にして所見を書いているか n=59

また, 何を参考に所見を書いているかについて多肢選択で聞いた結果が図4に示す。所見の書き方に関しては過去に自分が書いた所見を参考にしている教師が一番多く, 次いで管理職の指導, 文例集などの本が多く, 同僚や先輩の教師から学んでいる教師は半数以下であった。

4. 考察と今後の課題

所見は年に2~3回しか児童や保護者に配布されないが, 受け取った児童の半数ほどは担任の先生の言葉にありがたみを感じている。それだけに書く側の教師には, 児童が少しでものびるような所見が求められているが, 教師は所見を書くことに強い負担感を感じている。

ところが, 教員養成期に所見についての指導はほぼ皆無である。さらに教師になってからも管理職からの指導はあるものの, 日本語の文章的な校正が多く, 内容に関わる指導は少ない。

また, 今回のアンケートと共に多くの教師からの聞き取りで, 所見について学校内での交流など具体的な教師間での研修は非常に少ないことも分かった。そのため, 同僚や先輩教師から学ぶより, 自分で文例集などを参考に学ぶことが多くなっているのが現状である。

そこで現在, 児童にとって効果的な所見を書くことができる教師のキャリア形成支援を開発している。具体的には教師が書いた所見をテキストマイニング処理し, 他の教師の所見と比較する。その結果, どのような特徴単語があるかを具体的に知るシステムである。今後, その成果を公表していく予定である。

5. 参考引用文献

- [1] 山崎宣次 (2013) 小学校における校務の負担感, 大阪成蹊短期大学研究紀要, 第50号, pp. 39-52.
- [2] 西森章子ほか (2009) 小学校通知表・評価観点にみる学力観の分析: 認知領域に即したカテゴリーを用いて, 日本教育工学会論文誌 33(Suppl.), pp. 181-184
- [3] 細川和仁 (2008) 通知表・評価観点における学習者の位置づけに関する研究, 日本科学教育学会, 科教研報告, vol. 23, No. 1, pp. 37-40
- [4] 小川修史ほか (2012) 児童の変容把握を目的とした小規模校におけるテキストマイニングの有用性に関する検討, 日本教育情報学会学会誌, 第27巻, 第3号, pp. 3-14
- [5] 山崎宣次ほか (2013) 小学校通知表所見のテキストマイニング, 日本教育工学会 第29回全国大会論文集